

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 リハビリテーション学科

名 前 久保田清子

作成日 2025 年 5 月 9 日

1. 教育の責任

本学で現在までに担当した科目は以下の通りである。

基礎作業学（必修、1年次）、作業技術学Ⅲ（手工芸）（選択、1・2年次）、地域作業療法学Ⅰ（総論）（必修、3年次）、生活環境整備論（必修、3年次）、地域高齢者支援論（選択、3年次）、老年期作業療法学Ⅱ（必修、3年次）、地域作業療法学Ⅱ（必修、3年次）、社会生活支援論（必修、3年次）、作業療法卒業研究（必修、4年次）、作業療法基礎ⅠA（必修、1年次）、作業療法基礎ⅠB（選択、1年次）、地域作業療法学Ⅱ（老年期障害）（必修、3年次）、地域作業療法学Ⅳ（身体障害・発達障害）（必修、3年次）、作業療法特論Ⅲ（生涯発達）、見学実習（必修、1年次）、検査・測定実習（必修、3年次）、地域リハビリテーション実習（必修、3年次）、評価実習（必修、3年次）、総合臨床実習Ⅰ（必修、4年次）、総合臨床実習Ⅱ（必修、4年次）等を担当した。とくに科目群としては、主に基礎作業学群の一部と地域作業療法学群の科目を主に担当している。

学科専攻内では、2期生及び6期生の学年担当や臨床実習総括担当を継続して担当した。過去には図書委員も担当していた。今年度は、11期生の担当（副チューター）をしている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

ふれあいの理念は「人を尊び、命を尊び、個を愛す」であり、グループ全体で、保健・医療・福祉・教育のトータルヘルスケアシステムを構築することで地域の人々の幸せに役立つことを目指すとされる。この中で「急性期医療」、「長期療養」、「リハビリテーション」、「在宅支援」、「福祉」、「教育」の6つを柱とした事業を推進するとされる。リハビリテーション学科に所属しており、当グループの「リハビリテーション」事業を支える人材育成を通して広く社会貢献することが求められている。

主な担当科目が基礎作業学群と地域作業療法学群であり、クライアントの個別性・事例性を重視することとふれあいの理念との間に共通性が見いだせると考えている。ともするとICFの「心身機能レベル」の機能障害に偏る危険性があり、とくに「活動・参加」に注目することができる考え方を伝えることに重きを置いている。「活動・参加」そのものが「作業」であり、入学直後から学ぶ「基礎作業学」で「活動・参加」を意識した対象者の把握・思考を身につけて貫きたいと考えている。ふれあいグループのリハ部門の対象者は高齢者が多く、生活歴を視野に入れた対象者把握の重要性を理解することが、ふれあいの理念を実行するためにも重要であると考えます。

2) 理念をもつに至った背景

前述の考えに至った背景におおきく2つの要素がある。

ひとつは、国の政策・施策を含め世の中の流れが「当事者中心であること」が重要とされている点である。2000年代から「地域包括ケアシステム」が保健・医療・福祉の基本的な考え方に据えられ、「重度の要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される仕組み」が国を挙げて推進され、その流れの中で「一体的な対応ができる知識・技術を持った」人的資源としてのリハ専門職が求められている。一方歴史的には医療の世界で還元主義に基づいた機能レベルの変化が重視された時代もあり、疾病性と事例性のバランスをどう捉えていくか、立ち位置・捉え方を誤ると一体的な対応は困難である。「生活機能」は「心身機能」と「活動・参加」の枠組みで捉えることが求められており、残存機能を含めた心身機能を捉えつつ「活動・参加」に注目し思考できる力を養成することが必要である。また、このシステムが目指すところが「自分らしい暮らし」であること、それ自体が作業療法でいうところの『作業』そのものでもあり、その点を養成教育で伝える必要がある。

ふたつ目は、還元主義的な医療ベースの思考ではなく、自身の実践経験が「地域生活」を支援するという社会学ベースの「作業療法実践」を経験してきたことが大きい。「暮らし」に注目することの重要性を学生に理解して貰いたいとの思いが根底にある。

3. 教育の方法・戦略

基礎作業学群と地域作業療法学群に分けて述べる。

①基礎作業学群

「基礎作業学」は入学直後の1年次前期に配当されている。作業療法士が介入手段として用いている作業活動が、人の生活とどのような関わりと治療的意味をもつのか、また、どのように治療的利用が実践されていくのかを学習する科目である。「作業とはなにか」を理解することが主目標である。

科目配当時期が入学直後からの半年であり、高校卒業後間もない者になるべく抵抗なく大学での授業に慣れることができる様、配慮が必要である。まずは1回の授業時間が50分から90分へと大幅に延長されることで、授業時間の長さに面食らう学生が多い。教員が一方的に話す講義形式では集中力が続かないとの学生からの声（ミニツペーパーへのコメント）があった。このため、ペアワークや3～4名の小集団でのグループディスカッションを取り入れ、自ら発言し受講生同士コミュニケーションを取りながら学ぶ機会・時間を確保する様に努めている。いわゆるアクティブラーニングの手法である。また、これらのペアワークやグループ学習のテーマは18歳前後の若者の経験を思考できる「身近な作業」をテーマに設定する様に心がけている。そしてどの学生

も自身の体験・経験を交えた発言の機会が持てるよう、ワークシートを配布し、段階的に学習・理解が進む様に工夫している。具体的には第一段階では各自が自分の体験・経験を交えて設問に答え記入する過程を設定している。その上で、第一段階の記述を見ながら第二段階で他者に伝える、他者の意見や報告を聞いた上で第三段階として共通性や相違性とその背景要因等についてディスカッションするという手法をよく用いる。さらに、そのディスカッション内容をランダムに口頭報告するよう促す場合もある。そして学生から報告された内容に対し、肯定的なフィードバックを教員が返す時間を取る様にしている。さらに 2025 年度は、各自の情報端末（スマートフォン）から専用の頁にアクセスできる双方向性の情報コミュニケーションツールも導入を開始した。具体的には Quiz への回答や意見・感想を匿名で入力し、共有スクリーンで各々の回答や意見がリアルタイムで表示されることで、より能動的な学習の機会を設けている。

②地域作業療法学群

3 年次配当科目のため、より主体的な課題解決能力を養うべく、図書館の資料、公的機関のホームページ（例えば厚労省や市区町村、日本作業療法士協会、テクノエイド協会等）の情報を調べまとめる課題を設定している。この課題を通し、各種社会保障制度や施策、作業療法士の職域の広がり等、各テーマについて理解を深めると共に、主体的に探索し情報整理する力を養う機会としている。

さらに当事者が発言している動画（YouTube 等の動画、例えば別府リハビリテーションセンター等のリハ実践動画）を 15～30 分程度用いることで、興味・関心を高めリアリティを伴う具体的な理解を促している。

また、福祉機器への興味関心を高め必要な知識を得るため、国際福祉機器展（HCR）に参加し、情報収集する課題を設定している。2024 年度は、ひと班 5～6 名の小グループで、班ごとにテーマや調査対象を設定し、現地で調査を行った。受講生は展示ブース担当者やその場に居合わせた当事者から機器の使い勝手などを直に聞きとる経験をした。そして機器展で得た情報を持ち帰り、班ごとにわかレポーターに扮し、下級生相手に調査結果の報告をおこなった。福祉機器展への参加、福祉機器に直接触れ、さらに当事者ユーザーの声を聞く等の機会を得ることで、より現実的・実践的な学びの機会としている。

同様に、少しでも実践的・現実的な住環境整備を知るため、学内の手すりやスロープを題材にしたグループ学習も行っている。

また履修者への終講時アンケートにおいて、「産業作業療法」への理解度が低い結果が続いたため、2024 年度は、現在この分野で活躍中の作業療法士らが発信している動画や文献を用い、新たな領域を知り理解する機会を設定した。

4. 学習成果

1) ミニツツペーパーによる学生からのコメント

障害者の雇用・就労支援の授業後「法制度を活用して事業所等を設立できる事を知り、さらにどうしたら設立できるか興味を持った。地域 OT では地域にどんな施設やサービスがあるか知っている事がとても大切だと学んだ」

終末期の作業療法士の役割の授業後「それまでイメージできなかった終末期に作業療法士として何ができるのかについて知ることができた。さらに患者さん本人のリハビリテーションだけでなく、ご家族に対してどんなアドバイスや声かけをすべきか、とても深いなと感じた。ご家族に何ができるか、寄り添えるかじっくり考えたいと思いました」

2) manaba アンケートによる学生からのコメント

3 年生の福祉機器展参加報告会を聴講した 2 年生や同級生の他班の発表から、「来年自分も参加するのだと思うと楽しみになった。それまでに勉強をしっかりと準備したい」、「プレゼンテーションがとても面白く、Quiz 等もあって自然に知識が得られ引き込まれる発表だった。お手本にしたいと思う点が沢山あって勉強になった」など、自由記載欄で前向きなコメントが多数寄せられた。

3) manaba での主観的理解度アンケート調査

ふれあいグループでの医療研究会で調査結果を報告した。OT 協会のコアカリ 2019 に沿って地域作業療法学に関する設問に対し、「産業作業療法」への理解度が低かったため、予防医学との関係性を交えた「産業作業療法」を 2023 年度に引き続き 2024 年度は 2 コマ時間を取った。さらにレポート課題の素材テーマのひとつに加えた。

5. 改善のための努力

授業時間外の学習時間について：授業評価アンケートにおいて、学習時間が依然 30 分未満の学生が半数以上であり、時間外学習の習慣が定着していない。基本的な知識を理解し表出できる様に、定期的な小テストを引き続き実施する。

また、3 年次科目で班別学習時間を多く設定した結果、「他者とのコミュニケーションが上手くとれず苦痛を感じた」、「人前で報告・発表する機会が増え精神的にキツかった」などの声もあった。個々の履修者の特性を事前に把握し、班別学習の班分け時にメンバー構成を検討したい。（ただし、集団学習で起こりうる種々の問題を班員で解決していくことも重要な学びのひとつあるため、受講者にとっての負担の程度を注意深く把握し調整への介入を行うことが大切であると考え。）

6. 今後の目標

短期目標:担当科目の内、3 年次の地域作業療法学について履修者に対し主観的理解度調査を継続して行い、領域や内容項目ごとに理解度を把握すると共に要因分析を行う(とくに評価点の低かった領域や内容項目の分析検討を行う)。分析結果を次年度の授業計画に反映させる。(2025 年度末)

長期目標:コアカリ 2019 のなかで基礎作業学及び地域作業療法学に関する項目について、国家試験対策上及び卒前・卒後の臨床実践上、優先度の高い項目を明らかにする。その情報を踏まえ、効果的な授業計画(シラバス)に結びつける。国家試験対策として、2025 年度は、地域作業療法学に関連した過去問題に触れる機会を設定する。

【添付資料】

なし

※参考資料:

- ・2023・24 年度シラバス
- ・2022・23 年度授業評価アンケート
- ・2022・23 年度リフレクションペーパー
- ・2021・22・23・24 年度医療研究会発表資料
- ・2021・22・23・24 年度に実施した個別授業評価アンケート調査結果